

松岡 泰（まつおか やすし）教授への献辞

総合管理学部長 黄 在南

松岡 泰先生は、1994年4月に、熊本県立大学総合管理学部に教授として着任され、以後23年間にわたり、本学の発展に大きく貢献されました。2017年3月31日付けで定年退職されるにあたり、先生のこれまでのご貢献に感謝するため、さらに先生のご退職を記念して記念号を捧げます。

先生のお話によれば、学問への立志は、子供からの夢の実現とは言い難い、青春時代の自分探しの旅程に登場するある方との出会いによるものでした。様々なバイトを経験しながらも好きな本に心酔する、決して学業一筋ではなかった自由なままの大学生活の中で、後々学問との出会いに繋がる色々な世界を知る喜びを気づかせて下さったのが、大学2年のとき受講された当時東京大学政治学教授の有賀弘先生の講義でした。推測でいうしかありませんが、音楽、小説、映画など、専門を超えて多岐に広がる有賀先生の世界は、松岡先生の自分探しの旅程に漸く目的地を告げるほど凄かったものに違いありません。

大学を卒業されてから1年後、有賀先生からのお勧めもあって、成蹊大学大学院法学政治学研究科修士課程を受験し入学されます。その後の先生の研究者としての歩みに、もはや、迷いはありませんでした。大学院を卒業されたあと、立教大学法学部に助手として採用されますが、1985年9月には、それまでの研究の集大成に対して成蹊大学から法学博士が授与されます。そのあと、1986年4月には、愛知県立大学外国語学部に入職されます。

先生と本学部との縁は、先生にとっては、全く予想外のことだったらしく、別に地元熊本に帰りたいという強い願望があったわけでもありませんでした。先生のお話では、1994年4月に創設された本学部への就任要請の経緯について、その顛末は推測でしか知らず、未だに謎だということでした。謎めいた先生の教授としての御就任によって、新生総合管理学部は現在の姿へ向けて、勢い航海を始めることになります。

ときには曖昧さが漂う政治の世界を生涯、研究の対象にして来られた先生の言行は、驚くほど、曖昧さとは程遠いものでした。速戦即決の一点の迷いもない先生のお裁きは、とくに学内行政において、遺憾無く発揮されます。

2006年4月に学術メディアセンター長に就任されてからすぐさま、本学の図書館の奥深いところで、長年、日の目を見ず埃と虫と戦ってきた古文書や貴重図書に息を吹き返したのも先生でした。今や、本学の教職員と学生、さらに地域住民にとって生き活きとした知識の宝庫として幅

広く愛されています。

さらに、2008年4月には総合管理学部長に就任されますが、2年間の短い任期であったのにも関わらず、現在の総合管理学部の全容を整えて頂きました。

先生のリーダーシップにより実現に至った、教育・研究・学内行政に関わる改善策は数えきれませんが、何より革新的だったのがペーパーレス会議の導入でした。教授会の資料として出番を待っているそしてその使命を終えた膨大な紙の山とその準備に使われる貴重な時間は、資料を映すパソコンの導入とともに、記憶の中に消えて行きました。現在、本学においてペーパーレス会議を導入しているのは、本学部だけです。

中でも、特に力を入れて頂いたのが情報セキュリティ対策に向けての様々な布石です。学部の至る所に個人情報や入試情報などのマル秘情報が流出される危険性があることを察知された先生は、持ち前の推進力で学部の大手術を敢行されました。その模様変えによって、現在の学部の姿のほとんどが出来上がることになります。

様々な議論を重ねたうえでの情報実習室の設置は、まさに先生の肝いりの決断でした。「地域に生き、世界に伸びる」という本学の理念を確実に実現させるための大動脈がIT教育にあることを確信された先生は、学部のIT教育のインフラ整備が至急であることを誠心誠意、学部の多くの先生方々に語り掛けました。限られた学部の設備を、選択と集中という戦略的な視点から、有効に活用しようとする先生の揺るぎない信念は先生たちの心を動かし、情報実習室の実現に辿り着きます。今や、情報実習室は、昼夜を問わず若い人々の熱い知性がみなぎる、IT社会の様々な夢の語りを実現していく創造の空間に生まれ変わりつつあります。

先生は、躊躇うことなく次々と様々な施策の実現に全身全力で取り組まれていた時代を振り返りながら、次のようにまとめて下さいました。管理職に与えられた権限は、皆のためになるものを実現させるために最大限活用すべきだ、と。

先生は、1999年8月から2000年7月までの間、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学及びメリーランド大学カレッジ・パーク校において客員研究員として研究に没頭されます。帰国後は、待っていましたと言わんばかりの寄せられてくる学内行政の波の中でも、著述活動への熱意が一時とも冷えることはありませんでした。数多くの業績の中で最も高い評価を受けているのが、『アメリカ政治とマイノリティ』（ミネルヴァ書房、2006年）です。アメリカにおけるマイノリティの政治参加がアメリカの現代政治に与えた影響を歴史的に分析された名著ですが、トランプの勝利で終わったこの度のアメリカの大統領の選挙結果をある程度予見できるような内容構成だったためか、定年間際に寄せられてくる講演・報告依頼に呆れ返る様子でした。日本における政治学研究の重鎮として、定年を迎えられたからといってまだまだ看板を下ろさせるわけにはいきません。

教育・研究の内容や方法に関する先生の持論の中で、黄が最も共感し尊敬しているところが、難しい言説との格闘を重視される点です。生みの苦しみが伝わってこないテクニックの駆使に偏った最近の研究に躊躇なく警鐘をならししながら、政治学者らしく、時代を見据えて将来がグランドデザインできる確固たる思想の発信地としての学部の将来について時間を惜しまずあつく語って下さいました。

教育においても、目に見える結果を急ぐあまりのショートカットには断じて妥協せず、時間を

かけてもじっくり多くの文献を噛み砕いていく先生の講義とゼミは、学部の本の虫たちにとってはたまらない授業でした。むかし先生の自分探しの旅のとき、有賀弘先生との出会いがあったように、希望を灯す新しい出会いが本学においても多くあったに違いありません。

忘れてはならないのが、故郷熊本を想う先生の気持ちです。学内行政、研究、教育などで日々追われる忙しい日程の中でも、地域が抱える様々な課題に取り組む各種審議会などへの委嘱依頼も快く引き受けてくださいました。審議会での活動は単に席を埋めることとは違い、準備された膨大な資料をよく理解し、見識者としての適正な意見が求められるまさに責任が問われる重責です。このため、教員によってはあまり委員委嘱に積極的ではない人もいますが、故郷熊本への貢献は先生にとって重要な仕事の一つでした。

目前にまで迫っている先生の第二の人生はどのようなスタートになるだろうかと以前から興味津々でした。予想としては、これまでの人生に決して縛られることなく、違うことに迷いなく挑戦される光景が浮かんできました。公演・報告の準備でお忙しいところ、無理を言って、伺うことにしました。

予想は外れませんでした。いきなり物作りに挑戦したいという、想定外のことであるが予想通りのお言葉でした。とりわけ、日本の野草や伝統的な草花で庭を埋めつくしたいというお話でしたが、黄の当てにならない深い読みとして、何かとややこしい政治の世界もたまらないが、力を注いだ分返ってくる自然の世界の素直さに真逆の楽しさを感じられたのかもしれません。次は、英語圏の推理小説を原書で読みたい、趣味で読みたいとのことでした。上手くなる必要があるのかと首を傾げましたが、これまで先生が求めてこられた知る喜びに満ちている、より広い世界への旅の準備として理解しました。もちろん、先生のすべての源である好きな本との付き合いはちゃんと残してありました。

最後となりますが、先生が残して下さいました数々の実績と数々のお教えは、決して、忘れることも消えることもありません。大学の至る所に、先生との数々の記憶が息づいています。松岡先生、長い間、本当にお世話になりました。